

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	夏目漱石の則天去私をめぐって
Author(s)	姜, 美蘭
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1992 : 83 - 85
Issue Date	1993-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039332">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039332</a>
Right	
Relation	



## 夏目漱石の則天去私をめぐって

姜 美蘭

夏目漱石は日本人が一番愛読する作家であると言えるけれども、それは夏目漱石が日本の伝統的な思想の一つを最もよく代表しているからであると思われる。その伝統的な思想というのは「自己から自然へ」ないしは「実存から非実存化へ」というきわめて魅力のある考え方である。

夏目漱石は日本明治維新以後、大正・昭和をかけて今日に至るまで日本文学史にとって最高の知性作家として日本の精神文化を理解するのに一番役に立っていると思われる。漱石の作品ほど沢山の人の読まれている作品はあまりないだろう。

漱石が生きていた時代は明治維新から日清戦争・日露戦争を経て、世界第一次大戦に至るまでの日本の国難と国家発展の時代であった。このような時代を過ごしなが、彼は時代と一致しようとする側面で悩んだりする二重性とまた、伝統的な東洋的教養と入ってくる西洋文明の西欧的な教養との対立で悩んだ。この問題はただ夏目漱石という一人の英文学者だけの悩みではなくてその時代、その社会のすべての知識人が直面した問題であった。

とにかく、夏目漱石は一人の知識人として個人的な二重性と社会的な二重性を持ちながら暮らした。こういう中で、一人の若い英文学徒の心に芽生えた問題は何だろう。夏目漱石自身が告白しているように、彼は個人主義の立場であったけれども、問題はここにある。倫理的な理念としての個人主義と現実世界とは必ずしも一致するとは言えないし、調和することも難しいということである。倫理的な理念としての個人主義は当然宇宙の摂理とも一致するべきであるし、社会秩序とも一致するべきなのに、現実の個人主義はむしろ人生または社会を破壊する場合がある。

明治維新から世界第一次大戦までも近代資本主義国家の一員として発展途上にあつたその当時の日本社会が時代上に帝国の列強に伍して日清戦争とか朝鮮を侵略する行動などをみて盲目的な愛国者達のように嬉しくは思っていなかった。日本の国家発展が東亜細亜の分裂という重大な過誤を犯しながら進んでいくというのは一時的には成功するかも知れな

いけれども、将来どういう危険を招来するようになるかという点を一人の知識人としてある程度予感がしたかも知れない。ただ、彼のHumanizmが「個人的」という枠から脱することが出来ない限りより広い社会意識には拡大出来なかった。

「自己本位」という言葉は漱石の思想を理解するのに重要な鍵になる語句である。大正三年十一月に学習院で行なった講演『私の個人主義』のなかで、「然しながら自己本位といふ其時得た私の考えは依然としてつづいてゐます。吾年を経るに従つて段々強くなります。著作的事業としては、失敗に終わりましたけれども、其時確かに握つた自己が主で、他は賓であるといふ信念は、今日の私に非常の自信と安心を与へて呉れました。私は引続きとして、今日猶生きてゐられるやうな心持がします。実は斯うした高い壇の上に立つて、諸君を相手に講演をするのも矢張り其力の御蔭かも知れません」と述べている。『吾輩は猫である』のなかでも「自己を措いて他に研究すべき事項は誰にも見出し得ぬ訳だ」という趣旨の発言が出る。

夏目漱石が亡くなったのは大正五年十二月であつたので、この「自己本位」という信念は彼の公的生涯の大部分全期間を貫く根本思想であつた。このような信念は漱石にとって一番重要な思想であつたけれども、それはたった一人漱石に限らず、むしろ自我に目覚めた近代人の共通思想であつたし、近代精神の核心を成すものであるとも言える。

他の人の真似が世の中の慣習という、漱石の「自己本位」はどの時代にも古びない真理であると思う。

「則天去私」という言葉を辞典で引いてみると「夏目漱石の最晩年の言葉。小さな私を去つて自然にゆだねて生きること。宗教的な悟りを意味すると考えられている。また創作上、作家の小主観を挟まない無私の芸術を意味したものだとする見方もある。」（『広辞苑』一九九一年十一月十五日第四版・岩波書店）という意味が分かる。

漱石が晩年に到達した精神的次元は「則天去私」という言葉で表現しているけれどもこの言葉は漱石全集のどこにも表したことの無い言葉で、ただ亡くなるまえに時々談話のなかで出たり揮毫のなかで見ることが出来るぐらいであるので、この言葉が漱石の造語であるか、それとも有名書の出典による言葉であるか曖昧である。時にはあるお寺のお僧さんが言ったような気がする時もある。自然法爾とか一視同仁、明鏡止水などと根本的な意味としては似ているようなこの言葉は言葉自体としてはすでに耳に慣れていても言える。

問題は『ころ』や『道草』や『明暗』のような近代小説の大作を著した近代日本文学の大家の一人である漱石が晩年の心境を表現するのに「則天去私」と言っても、「一視同仁」と言ってもいいけれども「自己本位」を否定するような心境に到達した点に考えが至るのである。

『明暗』の執筆中に漱石が「則天去私」という言葉を使い出したのは既に広く知られている。けれども、漱石自身はどんな説明もしなかった。それはひとつの心的態度で、理論ではなかったため説明する必要はなかったのである。そのため後世の人々はそれに個人個人が考えている意味を付与して、またいろいろな価値付与が可能である。

まず、「私を去る」というのは自我、乃至自我意識が問題になる。漱石が自我を強く意識したのは英国留学中であつた。英国人の個人意識はとても強い。個性を尊重する。従って、自己ということだけを主張してそれに執着する。漱石は英国滞在の時から自己のような日本人を軽視する彼らに非常に憤怒を感じたけれども彼らの日常生活を知って、彼らが自己の責任から自己を守って自己を主張していることが分かった。近代小説には自我が主題になり、エゴイスティック人物が登場することも注意するようになる。元から漱石自身が個性的な人物であつたのでその傾向がここで強くなってもっと自覚的になった。漱石は文学研究にとっては、地元の英国人の説といつても無鉄砲に従わずに、日本人らしい自己の趣味と判断を主とする自己本位であると思われる。

夏目漱石の漢詩を見てみると最後年、即ち大正五年には自然のなかでの脱俗的境地に憧憬を秘めて表現した詩が多い。漱石は自然主義を大きく区別して人間の天性に従うことと山川の自然に帰することに区別したけれども、晩年の漱石の心境としてはこの二つが一つになっている。結局は、自然の道に従って自然に帰することになるからである。

夏目漱石をみる観点はいろいろな角度でみることができるけれども、私は人間的な立場としてまたは芸術的立場としての「自己本位」と晩年になって「則天去私」という自己本位を否定するような心境に達した表現をしたことについて焦点を合わせてみたけれども調べながらもっと奥深く勉強しなければならないとしみじみと感じた。これからも夏目漱石の思想と現実性との関わりについて考察してみたいと思う。例えば、日本人の思想のなかに、生活のなかにどういう影響をかけてどのような形で表れているのであるか調べてみたいと思う。漱石の思想と現実性との関わりについて調べながら同時に、漱石の思想の根本的な源泉になった思想や影響をかけた環境や本にあたる資料も調べながら勉強して行きたいと思う。